

古代アンデス文化における自然観とその変化の一事例： ペルー・ワウラ谷下流域出土の土器に描かれるイコノグラ フィーの分析から

市木尚利

ペルー・ボンティフィシア・カトリカ大学

大学院プログラムアンデス学研究科考古学専攻修士課程

中央アンデス海岸地域にあるワウラ谷下流域で出土した紀元後 8 世紀から 10 世紀の土器様式に描かれるイコノグラフィーの変遷を素描することで、後 8 世紀には野生動物と栽培植物（トウモロコシ）と人物などの表現が中心であったが、やがて幾何学文にカエル、ネコ科動物の図像が付属的に組み合わせられるようになり、後 11 世紀以降には、野生動物だけでなく、ラクダ科動物、人の身体的特徴・変形、植物の表現が豊かになっていく過程があることが想定できるようになった。この変遷には、自然観の変化も読み取ることができる。

はじめに

古代アンデス文化において人々は自然のなかで観察されるどのような動物、植物をイコノグラフィーに表現したのだろうか。そして、それがどのように変遷したのだろうか。イコノグラフィーは、宗教と深く関わったものであり、そこには象徴的に人間がもつ自然への意識つまり自然観が表現されている。もちろん、自然観だけでなく、イコノグラフィーには、それが描かれた時代の人間同士、集団間の関係も同時に表現される。

本稿で紹介する事例は、ペルー共和国 (República del Perú) にあるワウラ (Huaura) 谷下流域で主に出土する土器様式に描かれる図像・文様とその変化である。これらの土器は、後 8 世紀から 10 世紀を中心に使われていたものである。「チチャ (Chicha)」と呼ばれる発酵酒（トウモロコシなどを利用）を飲むためのコップ形の土器や貯蔵しておくための壺形土器に図像や文様が描かれ、儀礼、特に葬送儀礼を中心に利用された土器である。

本稿で利用する用語に「様式 (スタイル)」があるが、文化の本質と関わるものである。基本的には、考古学者イアン・ホッダー (Ian Hodder) が定義したものに従い、「行為の形相」(Way of doing) としておく¹⁾。各時代の文化には、それぞれ独自性の高い習慣があり、それが各時代を特徴づける個性的物質文化を作り上げている。「様式」、

つまり「行為の形相」は物質文化を作り出す習慣と深く関わっている。様式は、ある一定の規定のもとにつくられるが、その過程で選択が行われるため、バリエーションもみられる。但し、文化の単位と社会（国家など）の単位は一致しない²⁾。また、本稿では、イコノグラフィーの範囲は、彩色画だけでなく、人物や動物を象った壺や土偶も含めている。検討資料は、ワウラ図像彩色土器様式が 616 点、ワウラ幾何学土器様式が 195 点になる。

また、ワウラと周辺で出土した後 8 世紀から 10 世紀の土器に描かれるイコノグラフィーを特徴付けるため、後 11 世紀以降のチャンカイ文化期の土器のそれとも簡易に比較検討も行った。チャンカイ文化の土器は天野博物館の資料と私自身が作成に関わったアンコン (Ancón) 遺跡博物館のデジタルカタログの資料 1284 点を参照にしている。(http://www.museodeancon.com/japones/catalogovirtual.php?sec=4)

ワウラ谷下流域について (図 1・2 を参照)

ワウラ谷は、現在のペルー共和国にある谷の一つであり、南緯 10 度 30 分から 10 度 55 分、西経 76 度 35 分から 77 度 25 分の範囲に位置する谷である (図 1・2)。北隣には、スベ (Supe) 谷がある。ここには、2009 年に世界遺産に登録されたカラ

ル (Caral) 遺跡がある。南隣には、チャンカイ (Chancay) 谷がある。この谷は、ペルーの首都リマ (Lima) 市にある天野博物館が1950年代後半以降、約半世紀の間、「チャンカイ文化」(後10世紀から15世紀)の研究などを実施してきた谷である。ワウラ谷の名称は、この谷を流れる同名であるワウラ川に由来している。この川は、標高約5000mのアンデス高地に源泉をもち、アンデス山脈西斜面を下って太平洋へ流れ込んでいる。その全長は、約240kmである。本稿では、海岸から内陸へ20kmほどの範囲をワウラ谷下流域と呼んでいる。

気候は、リマ市に類似しており、年間降水量は、30から40mmとされ、平均気温は17度程度である。相対湿度は、80%を超えている。

紀元後8世紀－10世紀の社会・文化的動向の概要について

中央アンデス地帯(現在のペルー全土・ボリビアの北部に相当する範囲)において後8世紀から10世紀は、大変な激動期のひとつである。後6世紀にペルー南部の山岳地域に起こったワリ (Huari) 文化がペルー全土にわたって拡大し、地方文化に影響をあたえていった。そして、後8世紀後半には衰退しはじめる。勿論、地方には依然としてワリの文化的影響が強く、地方文化が漸次的に独自性を高めながら発展しはじめていく。

ワリ文化が中央アンデス全域に拡大する現象については、いくつかの解釈があるが大別すると二つある。一つは、ワリが「帝国」としての性格を備えていたためとする解釈³⁾と、もうひとつは、「帝国」現象ではなく、ワリ文化と地方文化の融合現象は、各地方の有力者たちの間で非常に大規模な地方間交流が起こったためであり⁴⁾、ワリ国家による地方のコントロールは低いものであった⁵⁾と解釈するものがある。

ワリ文化は、後7世紀には、ペルー北部海岸に到達し、後1世紀から発展していたモチエ (Moche) 文化と接触し、その結果モチエの文化的要素も南部の山岳地域に拡散していくことになる。ワリ文化の最盛期にもモチエ文化は消えずに継続しており、ワリ文化の衰退にともなって、モチエ文化も消えていくことが指摘されている⁶⁾。

モチエ文化だけでなく、モチエと同じ時期に発展してきたペルー北部の山岳地域を代表するカハマルカ (Cajamarca) 文化やレクワイ (Recuay) 文化ともワリ文化は接触し、相互に交流している。

後6世紀以降、ペルー南部の山岳地域と北部の山岳・海岸地域の諸文化が大規模に交流しあい、ワリ文化が各地方に強く影響を与える時期となっていく。

やがて後8世紀以降、10世紀頃までにワリの文化的影響が漸次的に衰退し始め、地方独自の文化的発展がみられるようになる。

本稿で対象とするワウラ谷下流域出土の土器は、後8世紀以降の過程でつくられたものと考えられ、山岳地域と海岸地域間の交流とその影響、そして変化が土器に描かれるイコノグラフィーに現れていると思われる。

研究対象のイコノグラフィーについて

本稿では、後8世紀から10世紀にワウラ谷下流域とその周辺の海岸地域でつくられ、利用されたワウラ図像彩色土器様式とワウラ幾何学文土器様式の二つの土器様式にみられるイコノグラフィーが研究対象となっている。

また、チャンカイ文化期(紀元後11世紀から15世紀)として知られる時期の土器にみられるイコノグラフィーと簡易にはあるが、比較検討も行い、紀元後8世紀から10世紀までの土器様式との違いを特徴づけ、想定されるイコノグラフィーの変遷を素描していく(これらの土器様式の分布範囲については図2を参照、土器様式の諸例については図3を参照のこと)。

ワウラ図像彩色土器様式のイコノグラフィーについて

この土器様式は、1972年にルイス・ウセラ・デ・マタ (Luis Usera de Mata) の論文に報告されたのが最初である⁷⁾。ワウラ図像彩色土器様式は、ワウラ谷下流域に最も集中して分布している(59% [全616例中364例])。この土器様式は、これまで中央アンデス地帯での考古学研究の成果から、「中期ホライズン」と呼ばれる時期(紀元後6世紀から10世紀まで)、特にその後半(紀元後8世紀から10世紀)に位置すると想定される。

しかし、残念ながら、これまで発掘調査でその

出土を確認したケースは報告されていない。あくまで、様々な土器様式の比較検討から想定している編年の位置ではあるが、近年のワウラ川河口付近のワチヨ（Huacho）市（リマ市から北へ約150kmの地点）に位置するセロ・コロラド遺跡での発掘調査で多量の土器が墓群から出土し、その研究成果が報告され始めている⁸⁾。出土した土器群は、ワウラ谷下流域での中期ホライズン末（紀元後10世紀前半に相当）から後期中間期（チャンカイ文化期）に相当するものであり、この時期の土器様式の変遷が発掘調査から明らかになりはじめている。ただし、数多くの墓の発掘調査で、ここで紹介しているワウラ図像彩色土器様式は出土していない。一方で、後で触れるワウラ幾何学文土器様式として設定した土器群は、この発掘調査で中期ホライズン末の墓から出土している。もちろん、ワウラ図像彩色土器様式のイコノグラフィー表現には、後期中間期の要素も垣間見れるものも一部あり、他の土器様式の図像・文様とワウラ図像彩色土器様式の図像・文様の間には、パノフスキー（Panofsky）のいう「慣習的同意関係」⁹⁾が認められるものがある。ワウラ図像彩色土器様式とワウラ幾何学文土器様式の間では、土器型式（細かく分類された土器の形態）を共有するものも多く、この二つの土器様式は、相対的・漸移的に時間差があるが、ある期間は共存していた可能性は十分に考えられる。

ワウラ図像彩色土器様式の始まりは明確になっているわけではないが、ペルー中央海岸のパチャカマック様式（後7世紀後半から9世紀）の後半期の影響も一部考えられることから、本稿では、これまでの考古学の調査成果などを踏まえて、紀元後8世紀から10世紀前半頃と想定している。

ワウラ図像彩色土器様式にみられるイコノグラフィーの特徴は、黒線で縁取りをしながら図像の輪郭を作り、輪郭の内側を赤茶褐色、白色、青灰色を主に利用しながら色づけしている。確認できる主な図像は、以下の通り：Ⅰ 人物形の図像（図4）、Ⅱ 三角状の顔（おそらく魚顔）をもつ神聖体（図5）、Ⅲ 魚形の図像（図6）、Ⅳ 魚形と人物形の特徴が合成された図像（図7）、Ⅴ ネコ科動物形の図像（図8、一部グリフォン形の図像を含む）、Ⅵ サル形の図像（図9）、Ⅶ 蛇形の図像（図10）、Ⅷ 植物形図像（トウモロコシ）

の群生シーン（図11）、Ⅸ 羽毛の図像（図12）、Ⅹ 鳥形の図像（図13）、Ⅶ その他の図像（図14）。

基本的には、植物形図像（トウモロコシ）の群生シーンを背景に単独の人物形、神聖体、あるいは野生動物、例えばネコ科動物形、蛇形の図像が描かれるている場合が多い。トウモロコシは儀礼のための発酵酒「チチャ」の原材料になるものであり、イコノグラフィーは儀礼作物への関心を中心に行っている。しかし、それ以外の植物、木の実やイモなどの図像表現は確認できず、イコノグラフィーの中では関心が皆無に近い。

家畜化されたラクダ科動物の図像表現はみられない。この点についても注意を払う必要がある。

ワウラ幾何学文土器様式のイコノグラフィーについて

ワウラ谷下流域を中心にして、ワウラ図像彩色土器様式に非常に類似した色使いをもち、幾何学的文様を主体に、付随的に図像表現が組み合わさる土器群が確認できる。分布の傾向は、ワウラ図像彩色土器様式と同じで、ワウラ谷下流域に最も集中して分布している（87%[全234例中195例]）。

また、先述したように、セロ・コロラド遺跡での調査¹⁰⁾から、後10世紀前半の中期ホライズン末から後期中間期初頭の土器様式であると考えられる。

イコノグラフィーの特徴として、幾何学文を主体に、両生類（カエル・イモリなど）、ネコ科動物の図像が付加されることが多い。これは、次のチャンカイ文化期にもみられる特徴である。しかし、ワウラ図像彩色土器様式にはみられない特徴である。ワウラ図像彩色土器様式とワウラ幾何学文土器様式は、色使いや土器型式は類似しているが、イコノグラフィーには、両様式の間継続性はみられず断絶の様相が強い。

幾何学文にもバリエーションがあるが、大別すると6つのタイプに分類できる（図15）。

- I “チャカナ（アンデス十字といわれるもの）”を主体とするもの
- II 階段状の線と四角で螺旋状になる線が組み合わさるもの
- III ジグザグ状の線があるもの
- IV 円形文が中心となるもの。

V 帯状のラインが階段状に表現され、角に円形文が付加されるもの

VI 垂直に直線文が並ぶもの

特にIのチャカナを主体とする文様構成にカエルの表現が多くなる傾向がある。土器の把手は、カエルの形をしたものが多い。カエルやオタマジャクシの表現は、伝統的にアンデス文化で見られるものであり、農耕のサイクルを知る指標だったと思われる。

チャンカイ文化期のイコノグラフィーとの比較

後11世紀以降に発展するチャンカイ文化に特徴的な土器は、白い上塗りのうえに、黒あるいは紺の線で幾何学文様と図像を描くのを特徴としており、チャンカイ谷、ワウラ谷とその周辺の海岸地域を中心に分布するものである。この文化期のイコノグラフィーは、幾何学文様が主体となるが、前の時期の土器様式にはみられないイコノグラフィー表現が現れてくる。ワウラ図像彩色土器様式/ワウラ幾何学文土器様式のイコノグラフィーとの違いに焦点をあてながら、チャンカイ文化期の土器様式にみられるイコノグラフィーの特徴を気づいた範囲で素描すると以下ようになる。

- 1) 土偶や人物形の壺が多くなる。また、これらは、人間の体の特徴や変形（6本指（図16）、せむし（図17）など）を忠実に表現しようとするようになる。
- 2) 家畜動物（ラクダ科動物）と野生動物の両方の表現がみられるようになる。彩色画、塑像としてもみられるようになる。
- 3) 多様な海や川の生き物（蛸、ヒラメ、エビなど）が描かれるようになる。彩色画、塑像としてもみられるようになる。
- 4) 植物の表現が豊かになる。トウモロコシ以外の図像表現も多くみられるようになる。
- 5) ワウラ図像彩色土器様式にみられた図像表現は、織物の図像・文様表現と類似性が高くないのに比べて、チャンカイ文化期には、土器と織物の間の図像・文様表現が類似性が高くなる傾向がみられる。
- 6) チャンカイ文化期の土器様式は、ワウラ幾何学文土器様式と幾何学文・図像の一部を共有しているが、幾何学文の表現はチャンカイ文

化期のほうが、一層複雑、精巧になっていく。

おわりに

ワウラ谷下流域とその周辺の海岸地域で出土した後8世紀から10世紀の土器様式に描かれるイコノグラフィーの特徴と変化の素描を試みてきた。本稿が主に検討の対象とした後8世紀から10世紀のワウラ地域でみられたイコノグラフィー表現は、後のチャンカイ文化期のそれに比べると動物や植物の表現は単調な傾向、つまり儀礼のために使うトウモロコシが背景になって図像が表現される傾向が非常に強い。このような表現や構造が主体になるのは、ワリ文化の影響であると考えられる。おそらくワリの影響を受けて、儀礼のための作物とその栽培への関心をイコノグラフィーの中心にしたのであろう。

ワリ文化衰退後、後11世紀以降に発展するチャンカイ文化の時期には、ネコ科動物だけでなく、家畜化されたラクダ科動物の表現、人の身体的特徴を捉えた表現が豊かに表現されるようになっていく。また、植物の図像もトウモロコシだけでなく、木の実なども表現されるようになっていく。イコノグラフィーにおいては、自然の多様性への関心がチャンカイ文化期のほうが高く、また人体の特徴・変形などの表現も含めて多様に表現される。

ワウラ谷とその周辺では、このようなイコノグラフィーの変遷が後8世紀から10世紀のワリ期、そして後11世紀以降のチャンカイ文化期に起こったと考えられ、そこには、人間と自然の関係に対する意識の変化のようなものがみてとれる。つまり、儀礼のための作物（トウモロコシ）とその栽培のサイクルを意識したイコノグラフィーから、農耕・牧畜・漁撈・人体の特徴や変形など多岐にわたって表現することを意識したイコノグラフィーへの変化が土器に認められる。

しかし、このような変化が起こった理由・背景についての解釈は、発掘調査のデータや織物のイコノグラフィーなどとのさらに詳細な比較検討が必要であり、今後の課題となっている。

参考文献

- 1) Hodder I. *Style as Historical Quality. The uses of Style in Archaeology*. Cambridge University

- Press, Cambridge, UK, 1990: 44-51.
- 2) Makowski K. *Las civilizaciones prehispánicas en la costa central y sur. Historia de la cultura peruana I*. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima, Peru, 2001:163-243.
 - 3) Isbell W H. *City and State in the Middle Horizon Huari. Peruvian Prehistory*. Cambridge University Press, Cambridge, UK, 1988: 164-189.
 - 4) Shady R. La cultura Nievería y la interpretación social en el mundo andino en la época de Huari. *Arqueológicas* 19: 5-108, 1982
 - 5) Jennings J. Understanding Middle Horizon Peru: Hermeneutic spirals, Interpretative traditions, and Wari administrative centers. *Latin American Antiquity* 17 (3): 265-285, 2006
 - 6) 同脚注 2
 - 7) Usera L. Una colección de cerámica del valle de Huaura, Perú. *Revista Española de Antropología Americana* 7 (2): 191-234, 1972
 - 8) Vallejo F. *Evidencias arqueológicas de un nuevo estilo cerámico en el valle de Huaura para el período Intermedio Tardío: El paso del Horizonte Medio al Intermedio Tardío. Arqueología en el Perú. Nuevos aportes para el estudio de las sociedades andinas prehispánicas*. Universidad Nacional Federico Villarreal, Lima, Peru, 2010: 229-248
 - 9) Panofsky E. *Estudios sobre iconología*. Alianza Editorial, Spain, 1972.
 - 10) 同脚注 8



図1 ペルー海岸沿いの主な谷の位置関係（ランバジェケ（Lambayeque）からナスカ（Nasca）まで、MapLinks/Tele Atlasの地図を一部改変）。本稿で扱うワウラ谷は、No15である。

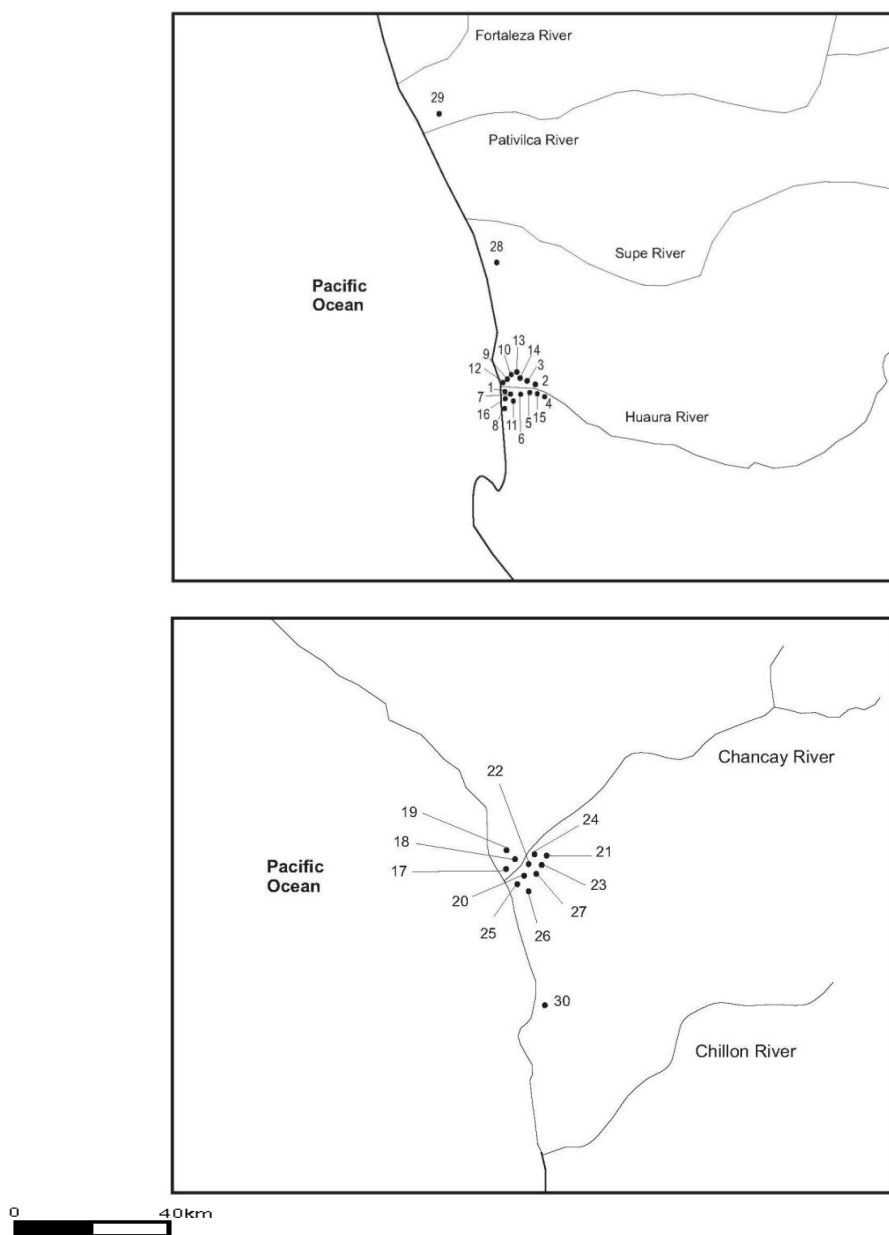


図2 ワウラ図像彩色土器・ワウラ幾何学文土器様式・チャンカイ文化期の土器様式の分布する主な遺跡

1. ワチヨ (Huacho) 2. ウマヤ (Humaya) 3. ヴィルカワウラ (Vilcavhuaura) 4. サン・ファン (San Juan) 5. ワカン (Huacán)
6. パンパ・デ・ラス・アニマス (Pampa de Las Animas) 7. センティネラ (Centinela) 8. サリーナス (Salinas) 9. サンタ・ロサリア (Santa Rosalia)
10. トレス・デ・マヨ (Tres de Mayo) 11. セロ・コロラド (Cerro Cololado) 12. ワカ・アマイ (Huaca Amay)
13. セロ・エル・ディアブロ (Cerro El Diablo) 14. ロントイ (Rontoy) 15. サン・ホセ (San José)
16. ルリヤマ (Luriyama) 17. ラウリ (Lauri) 18. トロンコナル (Tronconal) 19. チャンカイジョ (Chancaillo)
20. ミラフロレス (Miraflores) 21. ビスキージョ・チコ (Pisquillo Chico) 22. ビスキージョ・グランデ (Pisquillo Grande)
23. ビスキージョ (Pisquillo) 24. ポルティジョ (Portillo) 25. ラ・ワカ (La Huaca) 26. カキ (Caqui)
27. パルパ (Palpa) 28. カレタ・ヴィダル (Caleta Vidal) 29. ヴイント・アルト (Vinto Alto)
30. ミラマール・アンコン (Miramar-Ancón)



図3 本稿で扱う土器様式の諸例

1 ワウラ図像彩色土器様式 2 ワウラ幾何学文土器様式 3 チャンカイ文化期の土器様式

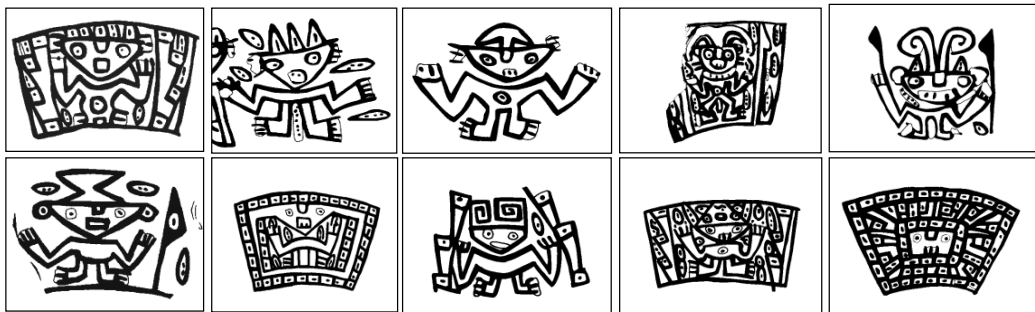


図4 ワウラ図像彩色土器様式にみられる人物形とその諸例

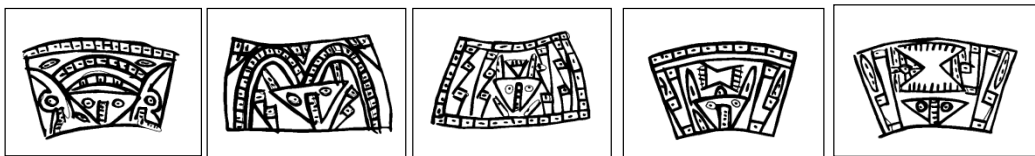


図5 三角状の顔（おそらく魚顔）をもつ神聖体とその諸例

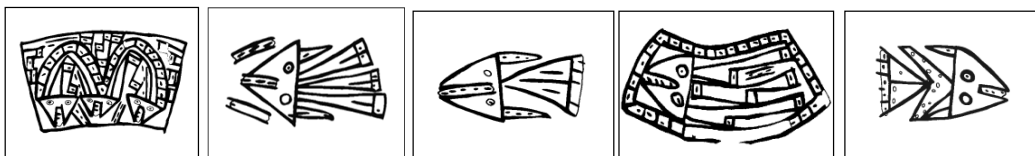


図6 魚形とその諸例



図7 魚形と人物形の特徴が融合した図像とその諸例

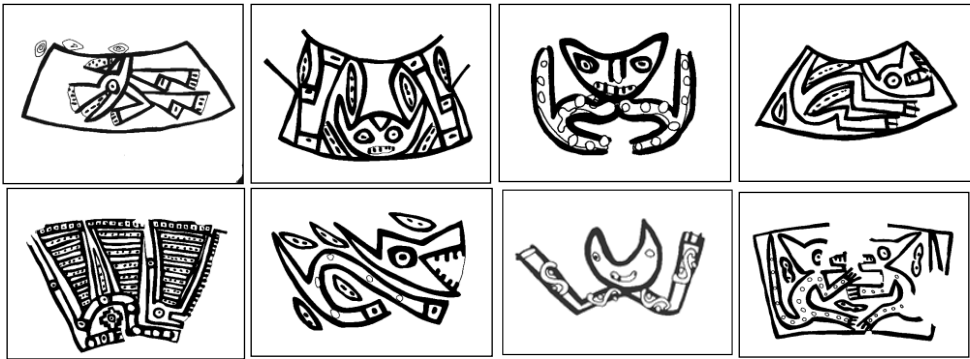


図8 ネコ科動物形とその諸例



図9 サル形

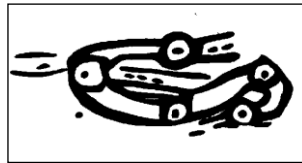
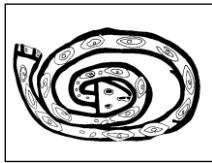


図10 蛇形とその諸例

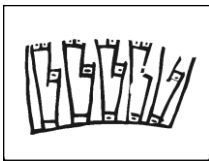


図11 植物形の群生シーン



図12 羽毛



図13 鳥形

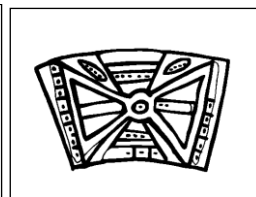
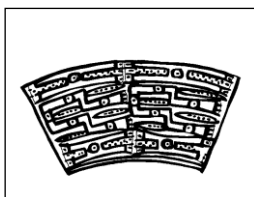


図14 その他の図像とその諸例

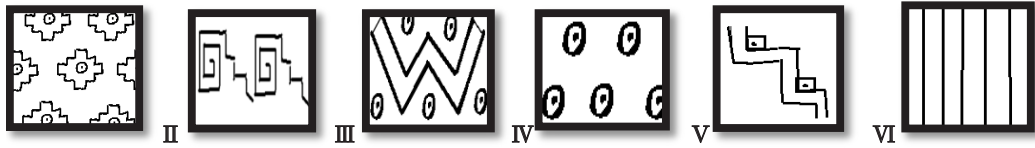


図 15 ワウラ幾何学文土器様式にみられる文様の分類



図 16 チャンカイ文化期の人物形土器。指は、6本となっている。偶然ではなく、一定量確認できる。織物にも6本指表現したものがある。写真右：人物形土器全体像 左：6本指の手（天野博物館所蔵）



図 17 「せむし」をもつチャンカイ文化期の人物形土器。右写真は正面からのもの。左写真は、側面からのもの（天野博物館所蔵）。

Summary

A Case Study of the Iconography Related to the Environment and its Changes in Ancient Andean Culture Analysis of Iconography in ceramic styles in the lower valley of Huarua, Peru

Naotoshi Ichiki

Maestría en Arqueología con Mención en Estudios Andinos, Pontificia Universidad Católica del Perú

We analyze the local iconography of the ceramic styles used from the 8th to 10th century A.D, in the lower valley of Huarua, Peru. Our objective is to outline the process of change observed in the representations of the environment in pottery. Huarua is one of the Andean locations which were influenced by the process of expansion and collapse of the Huari Culture.

The sample of the study was taken from 2094 vessels from different museums of Lima, Peru. In this study, the iconographic concept comprised drawings and sculpture representations.

Finally, we define three main phases of change. In the first phase, wild animals, domesticated plants (corn), and anthropomorphic figures were the main representations in pottery. In the second phase, a frog and/or a feline family are attached to a main iconometric geometrical design. And in the third phase, after the tenth century, a camelid, deformed anthropomorphical figures, and a richer diversity of plants are observed. Through these phases we can read the changes in the notion of environment.